

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 富盛 伸夫



学位申請者 カチマレク・ミロスワバ

論文名 日本語とポーランド語の対照談話分析—対人シフターの視点から—

【審査結果】

本論文は、日本語とポーランド語の対照談話分析の手がかりとして、談話における対人関係調整機能を担う「対人シフター」という概念を設定し、その談話中の交替パターンを調査することにより、両言語における聞き手敬語の使用実態を明らかにし、その機能を分析しようとしたものである。先行研究の極めて少ない日本語とポーランド語の談話分析を利用した対照研究の分野において、友人間の会話および教師・学生間の会話を自ら採集した音声データから多量の文字化資料を構築したことは先駆的な業績といえる。次に、言語構造の静的な記述ではなく人間関係の反映する会話中の動的談話機能を担う要素「シフター」（日本語においては文末の動詞・助動詞のスピーチ・レベル、ポーランド語においては動詞の人称形の選択）の交替を、構築した談話コーパスの中から抽出し、統計処理により使用実態の解釈的分析を行ったこと、さらに、その結論として話者間の上下・役割関係と親疎関係の相関として談話的意味が形成されていることを実証的に示したことについて、両言語対照言語学の領域でなしうるこの論文の貢献として、審査委員会は高く評価した。

本論文に対し、審査委員会は課程博士論文の主な要件とされる①論文で扱った主題の専門領域での意義・位置づけに対する認識、②先行研究の批判的検討と独創性、③分析の方法・手順とコーパス（データ）処理の適正であること、④論文の体裁、構成、文献の表示、必要な資料の添付他、⑤自立した若手研究者としての資質・能力の確認、などの諸点を考慮し、論文審査と最終試験（公開審査）の結果、全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい水準にある研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、富盛伸夫を主査に、副査として、申請者の研究生時代に指導教員として社会言語学的アプローチに基づく研究方法を指導された井上史雄氏（明海大学教授、本学名誉教授）、日本語・ポーランド語の対照言語学の優れた業績をお持ちのマーチン・ハウダ氏（千葉大学教授）を学外からお迎えし、学内からは、申請者が修士課程学生の間主任指導教員をつとめられ、現在まで副指導教員として密接に指導してこられた宇佐美まゆみ教授、スラブ語学の立場から申請者の副指導教員として指導してこられた中澤英彦氏に加わっていただき、五名の委員で構成された。

【論文の概要】

本論文は、対話する二人の話者の対人関係を表示する機能的言語標識として「対人シフター」という概念を導入することにより両言語における聞き手敬語の使用メカニズムを分析したものである。まず論文では、話者が自然に行う日本語とポーランド語の会話において対人シフターの交替を通して談話の対人的意味が形成されるという仮説的前提に立つ。そこでは、対人シフターの交替パターンが生み出す対人的意味が、日本語とポーランド語で共通であると措定する。話者間の上下・役割関係（話者間の非相称的關係）を表す交替パターンと、話者間の親疎関係（話者間の相関係）を表す交替パターンの相関係の分析により、この言語標識の談話における対人関係調節機能を記述する。以下、論文の概要を章ごとに簡潔にまとめ、審査内容の要点を述べて報告とする。

本論文の全体は、第1章（序章）から第8章（結論及び今後の課題）まで268ページがあてられ、引用文献6ページ、さらに、付録として、分析の基礎資料としてのアンケート内容が9ページ添付されている。

第1章では、この研究を行うにあたっての問題意識（日本語とポーランド語の母語話者の間に起きているコミュニケーション上の問題、ポライトネス上の問題、および言語教育上の問題という三つの立場）が示されたあと、「対人シフター」という概念の提示と定義が示される。先行研究（R. Jakobson, E. Benveniste, O. Jespersen, M. Silverstein 他）における類似概念との用法上の差異にも触れ、独自の談話機能を担う言語形式（直示的言語要素・対人的意味を表す言語要素・会話の結束性を保持する言語要素）としての対人シフターであると定義する。言語形式としては、ポーランド語においては、話し手と聞き手をレフェラントとして指し示す動詞の人称形が、日本語においては、話し手と聞き手の領域を指し示す文末のスピーチ・レベルが、この機能を担うとする。最後に、本論文の目的と意義を述べている。

第2章では、先行研究の批判的検討をふまえ、本論文における三つのアプローチを提示する。まず、文化心理学の観点からの言語使用、次に、ポライトネスの観点から欲求としての言語使用について述べた後、体系機能言語学の観点から選択としての言語使用について論じる。

第3章は、研究の動機となった聞き手敬語についての論考が中心におかれる。まず、日本語の聞き手敬語に関わる先行研究を紹介し、次に、ポーランド語の聞き手敬語表現と人称の関係について述べる。最後に、世界の諸言語における人間関係の反映という観点から、日本語の敬語とポーランド語の敬語表現の位置づけを示唆している。

第4章では、本論文の基点となる仮説を提示する。まず、対人シフターと Brown & Levinson (1987) のいうポジティブ・フェイス/ネガティブ・フェイスの概念を関連させて仮説1を、次に、日本語とポーランド語の会話における対人シフターの分布につい

て仮説 2 を、最後に、日本語とポーランド語の対人シフター切り替え操作の頻度について仮説 3 を設定する。

第 5 章は、研究方法についての章である。記述の方法は、得られたデータを、先行研究を参照しながらも、独自のコーディングの方法に従って分類している。(コーディング方法の詳細は割愛する。) 修士課程学生の時期から一貫して採集しデータ化してきた両言語の自然会話を対人シフターの交替に注目してタグ付けし、研究コーパスを構築している。両言語の自然会話として『教師と学生の個人面談』と『20 代女性同士の雑談』という場面を設定しており、この『20 代女性同士の雑談』においては「友人同士」と「初対面」という異なった場面も設定する。この章では、会話の参加者の情報、会話データの収集法、会話データの分析法及び会話データの妥当性について述べている。

第 6 章では、会話データの分析結果を提示する。まず、分析した会話データの基本情報を述べる。本研究のために使用された全会話数は 49 会話、内、日本語の会話 24 会話、ポーランド語の会話 25 会話。会話データの文字化の結果は、両言語の会話の総ライン数は 10521、総文数は 8981 である。会話データの平均文数において、日本語の会話 169、ポーランド語の会話 207 であった。日本語の会話データの分析には文末のスピーチ・レベルの切り替え操作を、ポーランド語の会話データの分析ターゲットとして動詞人称形の切り替え操作をとりあげる。『教師と学生の個人面談』の分析結果の対照において、話者間の期待する上下・役割関係を反映する対人シフターの切り替え操作の使用割合は日本語よりポーランド語の方が高いという結果を得た。他方、『20 代女性（友人）同士の雑談』の分析結果対照においては、話者間の「親しい」という談話的意味をもつ「下対下」という対人シフターの切り替え操作の使用割合は、全切り替え操作において、日本語は 96%、ポーランド語は 32%という結果を得た。

『20 代女性（初対面）同士の雑談』の分析結果の対照において、話者間の上下・役割関係という観点から見れば「上対下」という対人的意味をもつ対人シフターの切り替え操作の使用割合は日本語の方がポーランド語より高い。他方、「下対上」という対人的意味をもつ対人シフターの切り替え操作の使用割合はポーランド語の方が日本語より高いという傾向が見られた。この傾向は、初対面場面における日本語とポーランド語の話者の心理状況を反映するものだと考える。つまり、日本語話者の「上対下」という交替パターンの高い使用割合は、「下（カジュアル）のレベル」への欲求を反映すると解釈できる。他方、ポーランド語話者の「下対上」という言語行動の高い使用割合は、「上（フォーマル）のレベル」への欲望を反映すると解釈できる。

6.5. では、第 4 章で立てた仮説の検証をする。仮説 1 に関わる結果では、次のことが検証された。①日本語の敬体 (P) の使用（聞き手敬語の使用）と、ポーランド語の動詞の 1 人称形 (FR) の使用（聞き手敬語の不使用）は学生の発話において似たような使用割合を示すことから、会話の中で同じような機能を果たすといえる。つまり、ネガティブ・フェイスによる欲求を表す機能である。②日本語の常体 (N) の使用（聞き手敬

語の不使用)と、ポーランド語の動詞の2人称形(SC)の使用(聞き手敬語の使用)は学生の発話において使用頻度の近い数字を示すという結果から、会話の中で同じような機能を果たす、つまり、ポジティブ・フェイスによる欲求を表す機能である、と推論する。仮説2の検証結果では、対人シフターを含む発話は、全発話における使用割合という観点からすれば、日本語の方がポーランド語より多いことがわかった。これは日本語話者の方が、言語外コンテキストや対人関係の調整に多くの比重を置く言語使用と関連があるものと考えている。仮説3の検証において、対人シフターの切り替え操作の頻度はポーランド語の会話より日本語の会話において高いという、仮定した通りの結果を得た。

第7章では、第6章で示した日本語とポーランド語の会話データの分析結果から導き出さうる解釈を試みる。「上対下」、「下对上」、「上对上」、「下対下」という対人シフターの談話的意味について、まず、「上対下」と「下对上」という談話的意味は話者間の上下・役割関係を表すことがある。日本語では「(敬体)対(常体)P/N」と「(常体)対(敬体)N/P」、ポーランド語では「(動詞の1人称形)対(動詞の2人称形)FR/SC」と「(動詞の2人称形)対(動詞の1人称形)SC/FR」という言語形式の対立を通して形成される。次に、「上对上」と「下対下」という談話的意味は話者間の親疎関係を表すことがある。日本語では「(敬体)対(敬体)P/P」と「(常体)対(常体)N/N」、ポーランド語では「(動詞の1人称形)対(動詞の1人称形)FR/FR」と「(動詞の2人称形)対(動詞の2人称形)SC/SC」という言語形式の対立を通して形成される。

第8章では、本論の要旨をまとめながら結論を述べる。本研究の実証的研究により得られた知見を、仮説と検証という関係を含めて総合的に考察し、本論文の意義を再確認している。ここで、「社会言語学的規範や慣習に則った言語使用」の側面は、ポーランド語よりも日本語において、より顕著にみられ、それが対人シフター使用の頻度の高さに反映している、という解釈を提示している。最後に、本論文執筆後に残された今後の研究課題と反省点について述べている。

【審査の概要と評価】

審査委員によって表明された本論文に対する評価をまとめると、以下の点である。

高く評価された本研究の意義については、第一に、日本語とポーランド語の対照研究そのものの歴史が浅く、申請者の談話分析を利用したアプローチによる研究の成果は先駆的、かつ貴重な試みであること。第二に、特に分析の切り口として、談話における対人関係調整機能を担う「対人シフター」という概念を設定し、仮説と検証という手続きを経て、一定の統計学的な処理を援用し、言語使用の動態的側面の独自の解釈へとすすめたこと。第三に、独力で長い年月をかけ実際の自然会話を収集してコーパス化し、それをもとに実証的な分析をしたこと。第四に、蓄積した言語データの分析から着実に導かれた結論的知見は、両言語の話者直感に自然に受けとめられ、聞き手敬語の使用実態

の解明にとって説得的で優れた貢献であること。第五に、一昨年来いくつかの学会や研究会で口頭発表をとおして、助言やコメントを受けて研究の範囲と限界については意識していること、執筆過程でいくつかの主要な改善を幾度も試みており、すでに若手研究者としての自立的資質が認められること、などがあげられる。

以上の諸点を本研究の成果として高く評価した上で、最終試験（公開審査）では、方法上および論文提示上においてなお改善の余地がある点が、審査委員からいくつか指摘された。

第一に、研究の範囲と方法論に関わる点で、「対人シフター」という両言語に形式上は異なるものの「機能的に」共通する言語標識を、あえて対照し、しかも、この点に絞って分析したことが、十分に説明されていたかどうか。対人関係調整機能は、シフターが介入しない会話の受け答える要素、モーダルな要素や音声・イントネーションなど、言語の様々な他の部分も考慮に入れるべきであったであろう。これについては、申請者もこの論文は出発点であり今後の課題として研究の視野に入れているとのことであった。

第二に、申請者のいう対人シフター機能を担う要素は、発話の話題、発話意図、感情の動き、定型的表現、フォリナートークや幼児への適応表現などの文体変異、などの多様な識別機能を負わされており、この点を十分に説明すべきであったであろう。また、日本語とポーランド語の対照にとどまらず、西欧諸語やタイプの異なる言語との対照研究にも視野を広げるべきであろう。これらの指摘については、申請者は十分に問題性は理解し認識しており、今後研究領域を拡大してゆく意志のあることが確認できた。

第三に、論文の提示方法についての指摘があった。両言語の対照分析の文例について実例の引用が少ないことや、グラフや図示の工夫など改善すれば、より明快な説明がなされうる部分が指摘された。また、判断の根拠となった全コーパス（数百ページとなるとうも）を資料編として添付すべきであった。この点については、公開の場合には十分留意して、情報として公開できるものはすべて資料を提示することを表明した。

以上にあげた指摘は、いずれも、同様なアプローチによる先行研究の少ない、言語使用の動態的記述という先駆的研究領域に踏み込んでいることから生ずる制約に関連しており、これに挑んだ申請者の研究上の熱情と力量を評価し今後の研究の進展を期待させるものであるからこそなされたといえる。これらの指摘に対し、カチマレク氏は、論文の結語に反省点として記すなど十分自覚しており、口頭試問でも丁寧かつ誠実に応答する努力をした。

以上の経緯で審査委員会は、本論文が課程博士論文の要件を満たすかどうかの判断を行い、論文の内容と最終試験（公開審査）の結果を総合的に審議した結果、全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論に達した。